

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 高山 大毅

本論文は、江戸時代に盛行した徂徠学（古文辞学）とその影響を受けた水戸学や国学において、政治と文学についての思想がどのように展開していったかについて、「接人（人にまじわる）」という語によって表現される他者との関係のありかたを主題として論じたものである。

徂徠学の研究は、思想史の分野では丸山眞男や尾藤正英、文学史の分野では中村幸彦や日野龍夫らによって形作られた枠組みにより、荻生徂徠の政治思想や文学観がどう継承されたかが論じられ、制度や型に重きを置く点にその特徴を見いだしてきた。本論文はこれらの成果をふまえながらも、あまり注目されなかった題材や人物に着目することで、新たな視点を提示している。

論文は、序章で伊藤仁斎と徂徠の異同を分析したあと、礼楽を扱う第一部と修辞を扱う第二部、および終章とから成る。第一部の四つの章では、順次、徂徠、水足博泉、田中江南、會澤正志齋が取り上げられ、徂徠が操作の対象とした接人領域が、博泉では道具を基軸とする統治構想、江南では投壺という遊戯、正志齋では朝廷儀式の意義に注目した思索がなされ、各様に展開したことが分析される。第二部の四つの章では、順次、徂徠の『詩経』についての考え方、徂徠・江南の明詩注解、中国古文辞派の李攀龍の書簡を徂徠が編集したものの出版経緯、富士谷御杖の言語観が取り上げられ、本居宣長に代表される「自然」の文彩論に対して、彼らが「作為」の文彩論を主張したと評する。ただし、終章において、本論文で対象とした思想の流れは十九世紀には傍流となり、近代には直接つながらないことが指摘されている。

本論文は、近代から遡行するのではなく、徂徠と彼の後継者たちが当時の状況においてなぜそのような統治構想や文芸理念を説いたのか、博泉や江南の著述など、これまで顧みられてこなかったものも含めて多くの一次史料を活用したうえで論じている。明の古文辞派自体について、また、清や朝鮮など同時代の思潮との関連も深く考察されておらず、序章で批判的に言及される旧来の研究傾向から完全に抜け出していない面もあるが、論文全体に窺える視点の斬新さと実証の精密さとは高く評価できる。

よって、審査委員会は本論文を博士（文学）の学位を与えるにふさわしい水準に達しているものと判断する。